

弱いものに寄り添う視線

都甲 幸治

沼野充義のデビュー作『屋根の上のバイリンガル』が好きでたまらない。本人には怒られるかもしれない。この30年の歩みをきちんと見てくれ、なんて。でも好きなんだから仕方がない。

どうして好きなのか。語り手と一緒に、読み手も80年代のアメリカを旅することができるからだ。ハーバード大学に通い、車に乗って大陸を横断する。ソ連からのユダヤ系移民と出会い、シカゴのポーランド系コミュニティに出向く。その度に出会いがある。そして深く感じ、考える。読んでいくこっちまで楽しくなる。

たとえばバイリンガルについての記述だ。日本ではバイリンガルは良いものとしてしか語られない。英語ペラペラなんてかっこいいね、とか。でも、それが在日韓国人で、韓国語と日本語の完璧なバイリンガルだったらどうだろう。あるいは中国語だったら。ちやほやされるのは結局、英語やフランス語などと日本語のバイリンガルだけではないのか。

沼野の問いは政治的だ。そして、多言語について語るときに、学者ですらも忘れがちなのがこの政治性である。あるいはその政治性を、人々がぶつかり合ってきた歴史への意識と言いかえてもいい。どうして沼野はこうした問いかけができるのか。実際の人を見て、そこにある問題を感じ、自分の頭で考えているからだ。

本書に出て来るポーランド系のコミュニティはどうだろう。アメリカ合衆国では、英語しかしゃべれないモノリンガルな人々のほうが社会的な立場は上だ。そしてたいていの場合、バイリンガルな人々は貧しい移民と同一視される。これは、東欧系やアジア系、そしてラテン系も同じことだ。

シカゴのコミュニティで、アメリカ生まれなのに英語が下手なポーランド系の青年と沼野は出くわす。そして彼の人生の困難に思いを馳せる。確かに、この場所にいれば生きられるかもしれない。けれどもその外側ではどうか。そして沼野はポーランド系を笑うジョークについて語りながら、アメリカ社会に深く根づいた差別をほのめかす。

もっと深刻なのはイディッシュだろう。反ユダヤ主義が蔓延するソ連では、イディッシュの習得は推奨されなかった。なので多くのユダヤ人が、自分たちの言葉を失ってしまう。もし保ちつづけられても、別の困難がふりかかる。アメリカに移民した彼らは、英語という強力な言語に自分たちの文化を侵蝕されるのだ。

思えば、イディッシュは常に弱い言語だった。ヨーロッパで迫害されてきたユダヤ人の世界でも、信仰や哲学を語る権威ある言葉はヘブライ語で、イディッシュは女性や子供の言葉と見なされてきたのだ。

けれども、この弱さの中にこそ、沼野はむしろ強さを見る。常に話される言葉だったイディッ

シュは、「母の言葉」として母から子に受け継がれてきた。そしていつの間にか、演劇や文学など多くの花を開かせたのだ。

沼野充義の素晴らしさは、こうした弱いものに寄り添う視線だと思う。そしてまた、人々が生きてきた歴史を見据え、その中で彼らを感じてきた悲しみに共感しながら、物事を鋭く政治的に捉える力だと思う。

だから、何でも知っていていつも優しい沼野充義像は間違いだ。いや、そういう部分もあるし、僕も優しくしてもらった記憶はたくさんあるけど（どうもありがとうございます）、それだけじゃないんだな。

なので、複数の言語がぶつかって豊かな世界が開かれるんですね、なんてお題目を唱えるだけの学者たちと、沼野充義を一緒にしないでほしい。

沼野充義の柔らかさの裏には、鋭利な視点が隠れている。その二つが補い合っているから、彼の仕事は常に魅力的なのだ。そんな彼が好きでたまらない。